

スクールカウンセリングの創造(5)

——仙台市適応指導センター・研究開発プロジェクトの取り組みから——

*佐藤 静

On Creating School Counseling (5): Research project by The Sendai Transitional Guidance Center

SATO Shizuka

Abstract

The purpose of this study was to report on a research project by Sendai Transitional Guidance Center and to clarify the state of non-attending students at school in guidance classes. The research project started in August 2002. We executed a questionnaire survey with fifty four students in 2004 and eighty three in 2005. The student's motivation to associate with others was high in general. There was significant correlation between the variable of the motivation to associate with others and that of subjective well-being. On the other hand there was no significant correlation between the variable of subjective well-being and that of the will to return to school. It was assumed that factors other than the state of adaptation/well-being in the guidance classes were related to the motivation of returning to school. It is necessary to explore those factors in a qualitative case study.

Key words : Adjustment guidance class (適応指導教室)
Non-attendance at school (不登校)
Returning to school (再登校)
School counseling (スクールカウンセリング)
Sendai Transitional Guidance Center (仙台市適応指導センター)

1. 問題と目的

筆者は近年のわが国のスクールカウンセリング関連事業の展開を教育相談領域における創造過程ととらえ、仙台市の不登校対策をひとつのモデルとして、その経緯や成果について検討・報告してきた(佐藤, 2001, 2002, 2003; 佐藤・川村, 2005)。仙台市の不登校関連事業を主管している仙台市教育委員会事務局の教育相談課の主な事業は、諸学校へのスクールカウ

ンセラー・心の教室相談員・さわやか相談員の配置、適応指導センター・適応指導教室の運営、教育相談室の運営、特別支援教育に関する相談・支援事業、生徒指導に関する相談・支援事業等である。不登校児童生徒に対する学校外の相談・支援の柱となるのが適応指導センター「児遊の杜」と市内6箇所を設置された適応指導教室「杜のひろば」の取り組みである。6箇所の適応指導教室が平成5年から順次市内に開設されており、平成14年にはそれらを統括する適応指導セン

* 教育臨床総合研究センター

ター「児遊の杜」が設置されて現在に至っている。

文部科学省(2003)によれば適応指導教室(センター)の目的は「不登校児童生徒の集団生活への適応、情緒の安定、基礎学力の補充、基本的生活習慣の改善等のための相談・適応指導(学習指導を含む)を行なうことにより、その学校復帰を支援し、もって不登校児童生徒の社会的自立に資することを基本とする」(適応指導教室整備指針一試案)とされている。仙台市の適応指導教室「杜のひろば」の主な設置目的は、個別のカウンセリングや訪問相談を通して不安や悩みを解消し生活への意欲化を図る、体験を取り入れた集団での活動を通して自立心を養い社会性・協調性を育てる、個別化による学習指導を通して学習の遅れやつまづきを解消する、の3点である(仙台市教育委員会, 2002)。不登校状態にある児童生徒の心のケアや発達・成長支援の内容には各地域の実情に応じた特徴があり、適応指導の取り組みにも様々な工夫がこらされているところである。仙台市では適応指導センターと適応指導教室の指導スタッフで構成された研究開発プロジェクト班を組織して、適応指導のあり方について調査・検討を重ねてきており、筆者もそのプロジェクトに参加させていただいた。

本報告の目的は、スクールカウンセリング関連事業の展開を探るこれまでの作業の一環として、仙台市適応指導センターにおける研究開発プロジェクトの取り組みを紹介するとともに、調査データから適応指導教室に通級する児童生徒の心的状態を探り、適応指導のあり方について検討することである。研究成果の全体については仙台市適応指導センターの報告資料(仙台市適応指導センター, 2004, 2005)を参照願いたい。本報告は平成16・17年の調査データの一部を再掲するとともに新たな分析を加えて、その成果を補填するものである¹。

2. 仙台市適応指導センターの研究開発プロジェクトの取り組み

仙台市適応指導センターの研究開発プロジェクトの目的や内容は年度ごとに検討が重ねられ、プロジェクトのメンバーも一部入れ替わりながら継続している。以下、年度ごとに作成された記録資料と、報告資料と

してまとめられた『平成16年度 仙台市適応指導センター・研究開発プロジェクトのまとめ』(仙台市適応指導センター, 2004)及び『平成17年度 仙台市適応指導センター・研究開発プロジェクトのまとめ』(同, 2005)を参照しながら、取り組みの経過について述べる。

研究開発プロジェクトが立ち上げられたのは平成14(2002)年の8月である。その目的は、①「児遊の杜」と「杜のひろば」で対応する児童生徒についての的確な状態把握を行なうための効果的な手立てを探る、②個々の児童生徒の状態に応じて適切に指導するためのプログラムづくりを行なう、③学校復帰を実現するまでの復帰プログラムの開発を行なう、④児童生徒の特性を活かし社会性を養うために表現活動等を取り入れたプログラムづくりを行なう、の4点であった。初年度はプロジェクトの組織づくりと基本構想の立案・検討を行なった。

平成15年度の研究開発プロジェクトの目的は、①「児遊の杜」と「杜のひろば」で対応する児童生徒についての的確な状態把握を行なうための効果的な手立てを探る、②個々の児童生徒の状態の変容に伴う指導者側の指導理念のもち方を明確にする、③児童生徒の変容に応じて学校復帰を実現するまでの長期的な見通しをもったかかわり方の工夫や意図的・計画的な活動の設定を行なう、の3点であった。初年度に示された目的と比較すると、適応指導の現場の取り組みにおける具体的な問題意識がより強く反映されているといえよう。適応指導における実践記録とその分析がこの年度の取り組みの中心であり、対象ケースの行動記録を継続的に行いながら、状態像の記録と整理の方法が検討された。

平成16年度の研究開発プロジェクトの目的は、①「児遊の杜」と「杜のひろば」の児童生徒を理解する手立てを工夫して的確な状態把握を行なう、②一人一人の児童生徒の個性や状態に応じた適切なかかわりや働きかけをする、③児童生徒への対応の事例を収集して実践事例集を作成する、の3点であった。具体的な取り組みとしては、児童生徒の状態像の整理表を工夫・改善しながらそれを活用して状態像の変化を一貫した視点から理解すること、児童生徒を対象としたアンケート調査を実施すること、それらを踏まえて効果的なか

1 本報告は筆者(佐藤)の問題意識と視点による分析と考察であり、仙台市及び仙台市適応指導センターの公的見解ではない。

かわり方を検討することであった。そのために実態調査班と事例収集班を編成して、手分けしてプロジェクトに取り組んだ。この取り組みを通して「指導者側の感性を磨く」ことも謳われており、このプロジェクトが指導スタッフの資質向上を期待する取り組みでもあったことがわかる。

平成17年度の研究開発プロジェクトの目的は、①児童生徒の内的変化を理解するための実態調査を行なう、②働きかけによる児童生徒の変化を理解するための事例収集を行なう、の2点であった。前年度に引き続いて実態調査と事例収集を担当する二班を編成し、児童生徒の状態像の変化をよりの確に把握するために調査の回数を増やすなどの工夫がなされた。前年度から継続する取り組みが一定の軌道にのり、実態調査や事例収集の取り組みが充実した年度であったといえよう。

なお各年とも、調査の実施にあたっては児童生徒と保護者に口頭と文書で了承を得た上で、児童生徒の負担とならないように配慮した。

3. 調査と分析

3.1 第1回調査（平成16年度調査）

3.1.1 目的

児童生徒に対する意識調査を実施して、通所児童生徒の心的状態を理解するための手がかりを得ることが目的である。特に児童生徒が感じている主観的な好感と、それに関連性をもつ要素について探る。

3.1.2 方法

(1) 調査対象者

調査対象者は仙台市適応指導センター及び適応指導

教室に通級する小・中学生であり、調査の全期間（平成16年7月～11月）における回答者数はのべ121人であった。ここでは各施設の調査実施の足並みがそろった中期（9月～10月）の調査から54人分の回答を抽出して分析を行った。

(2) 質問紙

調査には質問紙を用いた。質問項目は次の9個であった。質問1＝自分から遊びにまざりたい、質問2＝遊びにだれかをさそいたい、質問3＝決まりやルールはめんどくさい、質問4＝人とおしゃべりするのは楽しい、質問5＝他の人はどんな気持ちだろうと思う、質問6＝体験活動にいつてみたい、質問7＝遊ぶときは他の子がいっしょにいたほうが楽しい、質問8＝遊ぶことが楽しいと思う、質問9＝最近の調子はどうですか。

質問1～8は「1＝ぜんぜんそう思わない」から「5＝つよくそう思う」までの5件法で、質問9は「1＝とてもわるい」から「5＝とてもよい」までの5件法で回答してもらった。（質問紙の内容の詳細については仙台市適応指導センター〔2004, 2005〕及び吉田〔2005〕を参照のこと）

(3) 実施手続き

調査の実施には適応指導センターと適応指導教室の指導スタッフの協力を得た。各施設の指導スタッフが児童生徒に質問紙を渡して記入してもらった。自分で記入できない児童に対してはインタビューの形で聞き取りを行なった。実施場所や時間帯は各施設の状況に合わせて対応した。

3.1.3 結果

(1) 回答結果

各質問に対する回答結果は表1のとおりであった。

表1 質問項目に対する回答者の割合（％）

質問項目	1	2	3	4	5
質問1 自分から遊びにまざりたい	7.4	5.6	29.6	38.9	18.5
質問2 遊びにだれかをさそいたい	7.4	7.4	29.6	37.0	18.5
質問3 決まりやルールはめんどくさい	14.8	22.2	35.2	11.1	16.7
質問4 人とおしゃべりするのは楽しい	3.7	1.9	25.9	35.2	33.3
質問5 他の人はどんな気持ちだろうと思う	3.7	5.6	27.8	38.9	24.1
質問6 体験活動にいつてみたい	5.6	13.0	29.6	31.5	20.4
質問7 遊ぶときは他の子が一緒にいたほうが楽しい	3.7	9.3	22.2	35.2	29.6
質問8 遊ぶことが楽しいと思う	1.9	7.5	15.1	34.0	41.5
質問9 最近の調子はどうですか	9.3	11.1	38.9	35.2	5.6

Note：質問1～8の回答値（1＝ぜんぜんそう思わない ～ 5＝つよくそう思う）

質問9の回答値（1＝とてもわるい ～ 5＝とてもよい）

(2) 回答値間の相関

9 個の質問項目の回答値間の Spearman 相関係数は表 2 のとおりであった。質問 9 の「最近の調子」(好調感) と有意な正の相関が認められた項目は「遊ぶことが楽しいと思う」($r = .437$), 「体験活動にいてみたい」($r = .431$), 「人とおしゃべりするのは楽しい」($r = .394$), 「自分から遊びにまざりたい」($r = .372$) であった。逆に有意な相関が認められなかった項目は「他の人はどんな気持ちだろうと思う」($r = .079$), 「決まりやルールはめんどくさい」($r = -.162$) であった。

(3) 因子分析及び質問項目 9 との相関

質問 1 から質問 8 までの項目について因子分析 (主成分分析法) を行った結果は表 3 のとおりであった。

主成分 1 に含まれるのは質問項目 7・4・2・6・1・8 であり、それらの内容から「他者との交流意欲」と解釈した。主成分 2 に含まれるのは質問項目 3・5 であり、それらの内容から「他者への配慮・義務意識」と解釈した。

主成分 1 「他者との交流意欲」及び主成分 2 「他者への配慮・義務意識」の因子得点 (主成分得点) と質

問 9 (最近の調子) の回答値との Spearman 相関係数を求めたところ、それぞれ $r = .379$ ($p < .01$) と $r = .225$ (ns) であった。

(4) 尺度の信頼性

質問 9 (最近の調子) と有意な正の相関関係が認められた主成分 1 「他者との交流意欲」に含まれる質問項目 1・2・4・6・7・8 の 6 個について信頼性係数 (アルファ係数) を求めたところ、 $\alpha = .893$ であった。

3.1.4 考察

各質問項目の回答傾向をみると、自分から遊びにまざりたい (質問 1), 遊びにだれかをさそいたい (質問 2), 遊ぶときは他の子が一緒にいた方が楽しい (質問 7) で「まあまあそう思う」と「つよくそう思う」と回答した児童生徒の合計はそれぞれ 57.4%, 55.5%, 64.8% であり、半数以上が遊びにおける他者との交流を望んでいることがわかった。また、人とおしゃべりするのは楽しい (質問 4) で「まあまあそう思う」と「つよくそう思う」と回答した児童生徒の合計も 68.5% であり、他者との交流を楽しみにしている児童生徒は少なくないことがわかる。

表 2 質問回答値間の Spearman 相関係数

	質問 1	質問 2	質問 3	質問 4	質問 5	質問 6	質問 7	質問 8	質問 9
質問 1		.748**	-.169	.440**	.309*	.617**	.614**	.583**	.372**
質問 2	.748**		.051	.488**	.332*	.611**	.682**	.389**	.205
質問 3	-.169	.051		.199	-.065	.039	.030	-.188	-.162
質問 4	.440**	.488**	.199		.259	.652**	.629**	.722**	.394**
質問 5	.309*	.332*	-.065	.259		.267	.203	.283*	.079
質問 6	.617**	.611**	.039	.652**	.267		.607**	.627**	.431**
質問 7	.614**	.682**	.030	.629**	.203	.607**		.600**	.251
質問 8	.583**	.389**	-.188	.722**	.283*	.627**	.600**		.437**
質問 9	.372**	.205	-.162	.394**	.079	.431**	.251	.437**	

Note : * $p < .05$, ** $p < .01$

表 3 主成分分析結果

	PRIN. 1	PRIN.2	共通性
質問 7 遊ぶときは他の子がいっしょにいたほうが楽しい	.853	.050	.691
質問 4 人とおしゃべりをするのは楽しい。	.829	-.086	.680
質問 2 遊びにだれかをさそいたい。	.824	.032	.857
質問 6 体験活動にいてみたい。	.798	.043	.694
質問 1 自分から遊びにまざりたい。	.780	.287	.423
質問 8 遊ぶことが楽しいと思う。	.674	.438	.639
質問 3 決まりやルールはめんどくさい。	.183	-.908	.729
質問 5 他の人はどんな気持ちだろうと思う。	.413	.503	.645
寄与率	50.0	17.0	

Note : 第 1 主成分 = 他者との交流意欲, 第 2 主成分 = 他者への配慮・義務意識

主観的な好調感を反映すると考えられる「最近の調子」(質問9)とより強い関係をもつ質問項目は「遊ぶことが楽しいと思う」(質問8),「体験活動にしてみたい」(質問6),「人とおしゃべりするのは楽しい」(質問4),「自分から遊びにまざりたい」(質問1)であり,逆に関係が弱いかほとんど認められない質問項目は「決まりやルールはめんどくさい」(質問3)及び「他の人はどんな気持ちだろうと思う」(質問5)であった。さらに「最近の調子」(好調感)と関係がより強い因子(主成分)は「他者との交流意欲」の方であった。他方,「最近の調子」(好調感)と「他者への配慮・義務意識」の因子(主成分)には関係性がほとんど認められなかった。以上の結果から,主観的な好調感は他者との交流に対する意識に反映されると考えられる。また,ルールを守ったり他者の気持ちに配慮したりする集団生活で必要とされる要素は,児童生徒たちの主観的な好調感に影響していないことが推測される。これが今回調査した適応指導教室の環境特性によるものなのか,一般的傾向であるのかは今後の検討を要する。

質問項目1・2・4・6・7・8の信頼性係数は0.8以上の高い値を示したから,それらの総合得点が児童生徒の主観的な好調感を判断するための指標となる可能性が期待される。

3.2 第2回調査(平成17年度調査)

3.2.1 目的

第1回調査に引き続いて児童生徒に対する意識調査を実施して,通所児童生徒の心的状態を理解することが目的である。今回は特に児童生徒の登校意識と他の意識との関係を探る。

3.2.2 方法

(1) 調査対象者

調査対象者は仙台市適応指導センター及び適応指導教室に通級する小・中学生であり,調査は平成17年の7月・9月・11月・1月の4期・4回にわたって実施された。全期間における回答者数はのべ286人であった。ここでは最も回答者数が多かった第3期(11月)の83人分のデータについて分析する。その内,登校状況を確認できた児童生徒は57人であり,1日以上登校がみられた登校群は46人,まったく登校がみられなかった非登校群は11人であった。

(2) 質問紙

調査には質問紙を用いた。質問項目は次の8個であった。質問1=遊ぶことが楽しいと思う,質問2=人とおしゃべりするのは楽しい,質問3=体験活動にしてみたい,質問4=決まりやルールはめんどくさい,質問5=遊ぶときは他の子がいっしょにいたほうが楽しい,質問6=学校に行きたいと思う,質問7=ほかの人はどんな気持ちだろうと思う,質問8=最近の調子はどうですか。質問1~7は「1=ぜんぜんそう思わない」から「5=つよくそう思う」までの5件法で,質問8は「1=とてもわるい」から「5=とてもよい」までの5件法で回答してもらった。

(3) 実施手続き

実施手続きは第1回調査と同様に行なった。

3.2.3 結果

(1) 回答結果

各質問に対する回答結果は表4のとおりであった。

(2) 回答値間の相関

8個の質問項目の回答値間のSpearman相関係数は表5のとおりであった。質問8の「最近の調子」(好

表4 質問項目に対する回答者の割合(%)

質問項目	1	2	3	4	5
質問1 遊ぶことが楽しいと思う	2.4	0.0	12.2	41.5	43.9
質問2 人とおしゃべりするのは楽しい	2.4	3.7	14.6	48.8	30.5
質問3 体験活動にしてみたい	6.1	14.6	30.5	32.9	15.9
質問4 決まりやルールはめんどくさい	12.0	16.9	45.8	14.5	10.8
質問5 遊ぶときは他の子が一緒にいたほうが楽しい	2.4	4.8	30.1	34.9	27.7
質問6 学校に行きたいと思う	16.9	22.9	39.8	18.1	2.4
質問7 他の人はどんな気持ちだろうと思う	7.3	2.4	36.6	31.7	22.0
質問8 最近の調子はどうですか	7.2	14.5	27.7	39.8	10.8

Note: 質問1~7の回答値(1=ぜんぜんそう思わない ~ 5=つよくそう思う)

質問8の回答値(1=とてもわるい ~ 5=とてもよい)

調感)と有意な正の相関が認められた項目は「遊ぶことが楽しいと思う」($r = .294$), 「人とおしゃべりするのは楽しい」($r = .298$), 「体験活動にいてみたい」($r = .283$), 「遊ぶときは、ほかの子がいっしょにいたほうが楽しい」($r = .233$), 「ほかの人はどんな気持ちだろうと思う」($r = .282$)であった。逆に有意な相関が認められなかった項目は「学校に行きたいと思う」($r = .186$), 「決まりやルールはめんどくさい」($r = -.153$)であった。

(3) 登校群と非登校群の比較

登校群(46人)と非登校群(11人)の各質問項目の回答値をMann-Whitney U検定によって比較したところ、結果は表6のとおりであった。有意差が認められた質問項目はなかった。

3.2.4 考察

各質問項目の回答傾向をみると、遊ぶときは他の子が一緒にいた方が楽しい(質問5)で「まあまあそう思う」と「つよくそう思う」と回答した児童生徒の合計は62.6%であり、第1回目の調査とはほぼ同じ結果であった。人とおしゃべりするのは楽しい(質問2)で「まあまあそう思う」と「つよくそう思う」と回答した児童生徒の合計は79.3%であり、第1回目の調査を上回る結果が得られた。他者との交流を楽しみにして

いる児童生徒の割合が多いことがわかる。

主観的な好調感を反映すると考えられる「最近の調子」(質問8)と関係が認められた質問項目は「遊ぶことが楽しいと思う」(質問1), 「人とおしゃべりするのは楽しい」(質問2), 「体験活動にいてみたい」(質問3), 「遊ぶときは他の子がいっしょにいたほうが楽しい」(質問5), 「他の人はどんな気持ちだろうと思う」(質問7)であり、逆にあまり関係が認められなかった質問項目は「学校に行きたいと思う」(質問6)と「決まりやルールはめんどくさい」(質問4)であった。集団生活におけるルール等への配慮の意識とともに登校の意識についても主観的な好調感との関連性が認められなかったことは、それらの要素が独立している可能性を推測させる。

さらに、元気に活動できる状態を反映すると考えられる質問項目(質問1・2・3・5)と登校の意識を反映すると考えられる質問項目(質問6)の回答値間にも有意な相関が認められなかったことから、双方の関係性は弱いと推測される。登校群と非登校群との比較でも、各質問項目の回答値には有意差が認められなかった。これらの結果から、適応指導教室における適応状態と学校復帰(再登校)の意識は独立した次元にある可能性が推測される。

表5 質問回答値間のSpearman相関係数

	質問1	質問2	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8
質問1		.634**	.321*	.029	.518**	.127	.287**	.294**
質問2	.634**		.315**	.141	.644**	.135	.317**	.298**
質問3	.321*	.315**		.043	.389**	.056	.146	.283**
質問4	.029	.141	.043		-.009*	.034	-.131	-.153
質問5	.518**	.644**	.389**	-.009		.157	.320**	.233*
質問6	.127	.135	.056	.034	.157		.098	.186
質問7	.287**	.317**	.146	-.131	.320**	.098		.282*
質問8	.294**	.298**	.283**	-.153	.233*	.186	.282*	

Note : * $p < .05$, ** $p < .01$

表6 登校群(N=46)と非登校群(N=11)の比較とMann-WhitneyU検定

質問	登校群の平均ランク	非登校群の平均ランク	U	W	Z	p
質問1	30.07	24.55	204.00	207.00	-1.094	.274
質問2	30.21	23.95	197.50	263.50	-1.204	.228
質問3	27.99	30.59	224.50	1259.50	-.494	.621
質問4	28.79	29.86	243.50	1324.50	-.211	.833
質問5	29.48	27.00	231.00	297.00	-.470	.638
質問6	29.68	26.14	221.50	287.50	-.685	.494
質問7	28.93	26.73	228.00	294.00	-.425	.671
質問8	28.86	29.59	246.50	1327.50	-.137	.891

Note : UはMann-WhitneyのU値, WはWilcoxonのW値, pは漸近有意確率値

4. 総合的考察

4.1 適応指導教室に通級する児童生徒の心的状態

今回は2年度にわたって2回実施した調査データに基づく報告を行なった。いずれも適応指導教室に通級する児童生徒の多くが、他者との交流を積極的に望み、楽しんでいる様子が認められた。入級後の心的状態の変化についてはさらに詳細な追跡調査を行なう必要があるが、今回の結果は小集団適応について配慮した適応指導環境における心的状態の安定化と活性化の成果を反映していると考えられる。

今回の調査では特に主観的な好調感と他の意識との関連性について分析した。他者との交流意欲や積極的な活動状態が主観的な好調感と有意な関連性があることが明らかとなった。このことは、児童生徒の心的状態を理解するための手掛かりとなり、適応指導上の重要な指標になると考えられる。他方、ルールの遵守意識や登校意識は主観的な好調感とは有意な関連性が認められなかった。このことから、適応指導教室に通級している児童生徒はそれらの事柄に対して一定の距離をおいてとらえているか、あるいはそれらの事柄についてあまり意識せずにごろしているのではないかと推測される。この結果には、人間関係や活動内容の面で配慮された環境である適応指導教室の特性が反映している可能性が考えられる。こうした適応指導教室の環境特性も考慮しながら、適応指導の取り組みを行なってゆく必要があるだろう。

4.2 学校適応の段階と過程

適応指導教室で元気に活動できる状態と登校意識には強い関連が認められず、登校群と非登校群との比較でも各質問項目には有意差が認められなかった。こうした結果から、登校意識には、適応指導教室の環境に適応して元気に活動できることや、主観的な好調感とは別の要素が関与している可能性が推測された。表7に学校適応の段階をめぐって再登校に向けて考えられる適応の更新の過程を示した(ここでは学校と家庭の両方の生活環境を含めて考察している)。

表7の段階1は不登校の発現の背景となる適応困難状態を示す。従来の適応スタイル/スキルが限界に達して状況に対応しきれなくなり、一時的に家や自室に退避した状態であるが、本人にとっては心身を守るた

表7 学校復帰に向けた適応更新の過程

段階	状態
段階1	学校・家庭生活における適応困難 (=従来の適応スタイル/スキルの限界)
段階2	適応指導教室への適応 (=新しい適応スタイル/スキルの生成・学習過程) (=学校・家庭生活における新たな適応に向けた再準備・学習過程) 登校動機の探索・発見
段階3	新たな学校・家庭生活における適応の実現 (=学校復帰と再適応過程)

めに懸命の適応を図っている状態と考えられる。段階2は適応指導教室における新たな適応段階を示している。家や自室に退避した状態から学校外の施設である適応指導教室に生活の場を移して、適応の更新を図っている段階であると考えられる。この段階の適応に成功することで、心身の安定が得られ、将来の学校・社会適応に向けた準備・学習を行なうことができると期待される。今回の調査結果から推測されるのは、段階2から段階3への移行のための支援の工夫が必要ではないかということである。それが学校復帰(再登校)に向けた登校動機の探索や発見の課題であり、その取り組みがうまくゆくと、段階3の新たな生活環境(学校以外の選択肢もあり得る)への適応過程に進むことができると考えられる。

適応指導教室に適応して元気に活動できるようになれば、学校に行きたい気持ちが自然に高まって再登校に至る、とは直接的には言えない可能性がある。むしろ多くの児童生徒にとっては、学校に足が向かない気持ちがあってもそれを留保させ、登校意識を促す何らかの積極的な動機や理由が生じて(あるいはそれを見つけて)、再登校につながるということがより実際的なかもしれない。その意味で、登校は本人の心的状態や学校環境をめぐる諸要素のバランスの上であり、適応指導教室における活動状態だけでそれを予測することは難しい面がある。適応指導教室で過ごす体験を再適応に向けた基礎づくりのための大事な過程・機会とした上で、適応指導教室と学校との両環境をつなぐ工夫が重要になってくると考えられる。

4.3 今後の研究課題と方向性

今回の調査から、児童生徒の心身状態を安定させ、他者との交流意欲や活動性を高めるという適応指導の

成果が認められたが、今後、学校復帰（再登校）に向けた支援の検討が課題のひとつになると考えられる。適応指導の目的は学校復帰だけに限定されない幅広い内容を含むが、教育資源としての学校を有効に利用することは児童生徒に対する成長・発達支援のための大事な柱となる。そのため児童生徒の適応を課題とするだけでなく、事態に即した学校側の対応、すなわち環境側の適応も同時に求められることになる（佐藤，2006）。学校側が不登校児童生徒の受け入れと教育支援のための積極的な工夫を行なう必要があり、適応指導の現場との連携・協力が不可欠である。そのための学校支援のあり方の検討が、今後ますます重要な課題になってくると考えられる。

研究方法に関しては、調査の回数や質問項目をできるだけ少なくして児童生徒の負担とならないよう配慮した。そのため、登校に向けた意識や主観的な好調感などの分析の妥当性や信頼性については一定の限界があると理解しなければならない。この点については別の機会をとおして再検討する必要があると考えている。今回は詳しい内容にまで触れることができなかったが、研究開発プロジェクトでは事例調査をもう一つの柱としている。事例収集の方法や整理・蓄積の方法にも工夫が加えられてきている。今後、児童生徒の理解や適応指導に応用できる具体的な手がかりが得られることが期待され、今回報告した実態調査を補填する質的方法として、事例調査を深めてゆく必要があると考える。

なお、研究開発プロジェクトの参加メンバーから、指導の現場で児童生徒の状態や指導内容についてスタッフ間で協議・検討する機会が増えたとの報告があった。この取り組みをとおしてスタッフ間で共有できる理解の視点や感性を育む環境が生まれていることがうかがわれる。この点も研究開発プロジェクトの成果のひとつとして挙げることができよう。こうした取り組みには目的や方法に関する共通理解や積極的な動機づけが不可欠であり、研究開発プロジェクトを継続してゆくこと自体が重要な課題であると考えている。

（謝 辞）

本報告をまとめるにあたって仙台市適応指導センターのご許可とお力添えをいただいた。調査にあつ

ては適応指導センター及び適応指導教室の指導スタッフの皆様と児童生徒・保護者の皆様のご協力をいただいた。個々のお名前を挙げることはできないが、心より感謝申し上げます。

（文 献）

- 文部科学省 2003 不登校問題に関する調査研究協力者会議編「今後の不登校への対応の在り方について」(報告)
- 佐藤 静 2001 スクールカウンセリングの創造, 宮城教育大学紀要, 第36巻, 289-301
- 佐藤 静 2002 スクールカウンセリングの創造(2), 宮城教育大学紀要, 第37巻, 369-384
- 佐藤 静 2003 スクールカウンセリングの創造(3): スクールカウンセラー調査と学校調査からの検討, 宮城教育大学紀要, 第38巻, 219-229
- 佐藤 静・川村水脈子 2005 スクールカウンセリングの創造(4): 学生ボランティアの活用について, 宮城教育大学紀要, 第40巻, 261-268
- 佐藤 静 2006 学校適応と軽度発達障害-心理臨床の立場から, 学校保健研究, No47, 36-37
- 仙台市教育委員会 2002 仙台市適応指導センター「児遊の杜」資料.
- 仙台市適応指導センター 2004 平成16年度 仙台市適応指導センター・研究開発プロジェクトのまとめ
- 仙台市適応指導センター 2005 平成17年度 仙台市適応指導センター・研究開発プロジェクトのまとめ
- 吉田千津 2005 適応指導教室における適応指導方法の研究, 宮城教育大学大学院学校教育専修・平成17年度修士論文

(平成18年9月29日受理)